

D.C. グリーンの『Tenrikyō』 (6)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前回は、グリーン氏の『Tenrikyō; or The Teaching of the Heavenly Reason』(天理教一天の理の教え)の日本語訳を行った中西喜代造氏の翻訳にまつわるエピソードや同論文の所感などを紹介した。今回は、大久保昭教氏がこの論文を取り上げた著書『外国人のみた天理教』(天理教道友社、1973年)で、同氏がどのようにこの論文を評価しているのかについて見ていくことにする。

『外国人のみた天理教』は、大久保氏が『みちのとも』に1970年(昭和45年)1月号から1972年12月号まで合計36回にわたり連載したものをまとめて、1973年に出版したものである。同氏は、異文化圏での布教伝道においては、異なる文化へいかに順応するのかを検討すること、またそのためには異文化圏の人々の考え方や天理教の受け止め方などに関する体系的な視点を蓄積していくことが必要であり、その手がかりの一つとすることが同書執筆の経緯であると述べている。そして、執筆にあたっての問題点として、外国人が書いた天理教に関する文献の中には重要な部分について誤解がみられることがあるが、これはそのつど指摘して修正すべきではないかという点、また文献の執筆者の立場が研究者、外交官、新聞記者、大学院生などさまざまであり、これらを同様にとりあげてその内容を紹介していくのが適当なのかどうかという点などを挙げている。しかし、「偏見と誤解が入り乱れているとしても、わりと情熱的に取り組んでくれている外国人の天理教研究を、ひとまず整理して、一つの見方・考え方として耳を傾けてみる必要があることではないかと結論」づけ、「彼らの文献に述べられた、いくつかの特徴を年代順に取り上げてみようとする意図」(14頁)から、この『外国人のみた天理教』を執筆している。

その主な内容は次のとおりである。まず「原初期の三大研究」としてグリーン、バレー、ハースの研究を取り上げ、続いて明治末期から戦前までの「新しい研究の胎動」としてウオレンとホルトムを取り上げている。そして、終戦後まもなく出されたストラレンの大作を取り上げ、それ以後を「多彩化した天理教」として、ハンマー、トムセン、ブラックウッド、ニューウェルなどの研究を取り上げ、最後に「世界たすけへの道」でまとめとしている。このようななかでグリーン氏の「天理教一天の理の教え」はまさにその最初期の論文として一番目に取り上げられている。

大久保氏は、「グリーンはまず第一に、天理教の発生は独自のものであるという前提をもって本教をとらえた」(25頁)のであり、またグリーン氏は「天理教は『日本国民大衆の宗教状態に深刻な教化を与えただけでなく、その独自の心理現象は日本の信仰生活に実に有力な感化を過去にも現在にも与えている』という前提のもとに筆を進めた」(27頁)としている。また彼の研究姿勢について、「偏見と悪感情におおわれた並みある当時の反天理教文献によっても、いささかも自らの着目点を狂わせていないグリーンの本教への態度は、さすがに海外伝道者として、国際的文化人としての面目躍如たるものがあると申せよう。」(27頁)とその「偏見なき研究態度」(25頁)を評価している。

そして、グリーン論文の内容を紹介しながら、随時所感やコメントを記している。ここでは参考までに、特に筆者の目を引

いたものをいくつか挙げておきたい。

- このグリーン「元はじまりの話」を読んでゆくと、なるほどよくわかる一つの筋道をたどることができ、非常によく理解できるのは、どうしてであろうか。おそらく、こうした感じを抱かれる方も多いと思うのだが、これは英語という言葉の特殊性からきているのか、グリーンのまとめ方が上手なのかは私自身も判然としないが、何かあるような気がしてならない。(36頁)
- 種々の方途をもって、天理教全体についての考察を展開したグリーンであったが、その最も主要なよりどころとしたのは、やはり本教の文献であったようである。(38頁)
- グリーンは最大の努力を傾けて、この聖典への理解に取り組むのであるが、まず、おふでさきの英文訳を手がけている。(中略) みかぐらうたの場合もそうであるが、この英文への翻訳に当たり、日本文の解釈にそう多くの誤りを犯していない点はさすがであり、その理解力と努力は大変なものがあったと推察される。(42～43頁)
- 今日全体をよく検討してみると、意味を取り違えた部分もあるが、今ここで、グリーンがこの英語への翻訳の仕方についての価値は問わないこととする。なぜなら、このグリーンに続いて幾人かの外国人が、こうしておふでさきの一部やみかぐらうたの翻訳を手がけたのであり、今日教会本部から出されているものと比較してみることは非常に興味のあることで、ぜひ研究せねばならぬ課題であるが、別な機会に種々な翻訳を考え合わせるの方が、より意味深いものがあると思うので、…(46頁)
- 真摯な態度で本教に取り組んだグリーンではあったが、広大な本教の教理の淵をさまよいながら、魅力ある清泉にたどりついたその時に、フトわれにかえる旅人のごとく、キリスト教徒の殻の中にもぐりこみ、結局は親神という概念には、たどりつけなかったようである。(56頁)
- キリスト教が日本文化に影響を与え、その日本文化が天理教を育てたことは、結局、キリスト教の影響を天理教も受けているのだという論理を控え目ながらもおし出し、ついには「親神」という思想は理解し難いものである、という結論に達したのであった。(中略) この天理王命が「人類の親」であるという最も肝心な教えの焦点をぼかしたことは、この研究の限界を、はっきり示したと言って過言ではなからう。(63～64頁)

上記からは、外国人であるグリーン氏が天理教の教理や当時の様子についてどのように見聞き理解していたかをうかがい知ることができる。また、当時の日本社会における天理教への認識がいかなるものであったのかを知る手がかりとなっているとも言える。大久保氏は、「グリーンは、当時としてはなかなかの炯眼げいがんの持主であり、今日なお指摘さるべきいくつかの問題点を提起していることを思うとき、記憶されるべき先駆的研究と呼ぶにふさわしい労作と言ってよいであろう。」(64頁)と述べてこのグリーン論文に関する稿を締めくくっている。この論文はまさに外国人による先駆的研究であり、天理教の伸展期かつ海外伝道の草創期の状況を理解する上にも意義のある論文と言えるであろう。